
雲居の月 - ある孤独な人の肖像 -

十司 紗奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雲居の月 - ある孤独な人の肖像 -

【Nコード】

N3384Y

【作者名】

十司 紗奈

【あらすじ】

一つの国に皇帝と將軍という二組の統治者が存在する時代、自分の願望を叶えるためにあらゆる物や人を利用し、手段も選ばなかった男性の一代記と、その周囲の人（妹や家人）の物語……を目指しています

第一章 みやこの春

一・

明けて正月となったが、帝都みやこの空気は閑散としていた。

灰色がかった雲は、重く空を覆い、人気のない通りを冬の、身を切るような冷たく乾いた風が吹く。人も、牛車も、馬の影も通らぬ路は、一層空気を寒々とさせ、かえって目に見えぬ物が歩いているのではないか、という薄ら寒いものを感じさせた。

家々も静まりかえり、板部が動く気配もなく、人がこそと動いている様子もない。まるで家の奥で息を潜めているかのように。

そんな市井の様子を後目に、二条大路の北、東京極大路の西1町（約120m四方）を占める邸宅から、ゆるやかな楽の音が風に乘って聞こえてきた。地下の楽人が、この家の当主に依頼されて祝賀の楽舞を寢殿正面の南庭で披露していたのだ。

やがて楽舞が「太平楽」になった時、屠蘇酒を楽しみながら末広をもてあそんでいた男が、ふと手を止めた。

「……今の世に、最も似つかわしくない楽だな」

正面の階はしがくしのま隠間で、見るともなく見つめていた男はポツリと呟く。

この家の当主、今小路俊之だ。年があけて20才になったばかり。立烏帽子に萌葱の直衣。くつろいではいるが正しい姿勢、一見温和だが、冷静な相貌。激昂する事を知らないような落ち着いた声。いかに「貴種」の生まれの貴公子といった風情だが、その眼光は、穏やかな顔立ちとはそぐわない程、鋭く強いものだった。

傍らに控えていた姫君が、微かに首を傾げたが、その言葉に同意も否定もしなかった。

「今年も例年とかわらずに明けたものだ」

言葉の奥の皮肉めいた響きに

「変わりがないと、ご不満ですか？」

と、樂の音に耳を傾けていた傍らの姫が、からかうような声で、そう返してきた。

「変わった方が、面白いとは思わないか？こんな世の中は」

「変化を好まない者も、おりましよう」

「そうして、そのまま、流れない水のように濁って腐っていくのか？」

「お兄様は世の中を変えようとなさるより、もう少しご正室様を大事にすべきでございましょう？」

「おやおや。新年早々に小言を聞かせるつもりかい？晶子」

彼女は顔を兄の方へと向けた。新春らしく、梅の襲、常盤の単衣、葡萄染めの唐衣、濃色の袴、白腰の裳に裱扇。ぬけるように白い肌と焦点は合っていないが、物憂げな瞳、そして青みを帯びた艶やかな黒髪。父親が、生まれたばかりの娘を見て、後宮に入れ、国母となり、皇帝の外戚となる夢を抱いたとしても責められない。

「新年早々、御文を頂きましたの、大納言様から。去年は、たったの二度しか顔をお見せにならなかった上、お渡りも無かった、と」「宮仕えや何やらで疲れて、重い足を引きずりながら伺っても、やれ何故もつと頻繁に来ないのだの、何故すぐに歌や文を返さないのだの、他の方の所へ通うのでお忙しいのだろっ、などと責められては足も遠くというものだよ」

「重い足だなんて。お兄様は牛車に乗っているだけではありませんの？」

「そういう問題ではないよ。第一、私ではなくお前に文を寄越すなんて、配慮のない一族だと思わないか？」

「それはお兄様が言っただけの良い言葉ではありませんわ。大体、私とて文の内容を知る事くらいできます。耳がありますもの」

「わかった、わかった。では年賀がわりに向かう事としよう。それでよかるっ？」

「……お兄様は今小路家の当主なのですから。ご正室様と合わぬのであれば、側妾そばめ置かれたらどうです？」

「それはお前が心配する事ではないよ」
淡々とした声の中に不快の色を感じ取って、晶子は口を閉ざした。兄は側妾や跡継ぎの事を話題にされると立腹する。勿論、それを出したりはしないが。

「……よもや左大将様が、我があばら屋にお見えになる日が来ようとは思いませんでした」

藤原公忠は自分の息子と年は変わらぬであろう客人に頭を下げて、そう言った。「ご正室様」のご機嫌伺いに行った帰りに、彼はこの邸宅に立ち寄ったのだ。最も昨日から、家人に申しつけて、訪問を伝えていたのだが。

「藤参議殿、お顔をお上げ下さい。左近衛大将と申しましても名ばかり。この世の実権は右近衛大将を兼任する鬼頭將軍が握っておられる事は童でも存じておりましょう」

その言葉に公忠は顔を上げた。そこへ邪気の無い笑顔を見せ「実は、その將軍の事で相談に参ったのです。聞いて頂けますか？」
「何なりと」

「年賀の祝いに、何か献上したいと思うのですが。実は、良い驚を手に入れます。来月の驚合によかろうと思つて居るのです」

その言葉に、相手は眉を顰めた。

「……おそれながら、先代と違い、当代將軍義重公は華美なものも嫌いです。自分に敵しい方ですが、他人にも同じく敵しい。そういった愛玩品は喜ばれないと思います」

俊之は大仰に嘆息をついた。

「そうでしたか。それは良い事を伺いました。余計な了見で睨まれてはかありませんから。ああ、これは失言を」

「將軍は、非常に御酒を好まれます。酒樽を差し上げれば喜ばれましょう。左大将殿は……その……桃陵ひょうりやうに縁ゆかりがございますし」

俊之は素直に頷いた。

「確かにあの地は酒所。そうさせて頂きましよう」

その晴れやかな表情を見て、公忠は意を決したように唇をかむと「……実は、お耳に入りたい事がございます」「何でしょう?」

声を潜めて、俊之も身を乗り出した。

「將軍は、怪異に悩まれておられるのです」

「またもや二条大宮に百鬼夜行でも現れましたか?」

「いえ、年が明けてから三晩続けて、同じ夢をご覧になったそうなのです」

「ほう。瑞夢でございますか?」

「それが……黒い大きなネズミが、青い蛇を喰らう、という夢でございます」

「ネズミが蛇を?」

「はい。非常に生々しい夢だそうで……何かの神託ではないか、と」

「よろしければ、その夢の意味をお調べ致しますでしょうか?」

「はい、是非に!」

「では陰陽師に日付を答申させますゆえ、それまでに將軍が身につけておられる物をこちらへお渡し下さい」

そう告げた後、俊之は早々に公忠の邸宅を後にした。

牛車に一人揺られながら、彼はほくそ笑む。思いもよらない収穫を得た。上手くいけば、この縁で、幕府要人や、もしかすると將軍と伝手を得る事ができるかもしれない。それはまさしく好都合以外の何物でもなかった。わざわざ足を運んで、猿芝居をしたかいがあったというもの。

將軍の華美嫌いは聞きおよんでいた。それが先代の父への対抗心からだという事も。そんな彼でも、父の方針を継続しているものもある。その一つが「公家家礼^{くけかれい}」だ。

貴族が隆盛を極めた時代は過去となった。

今では貧困にあえぎ、それでも体裁を保たなければならぬ貴族達は、所領の一部の土地や家宝を手放しながら生活をしている。そんな彼らにとって將軍家の「家礼」になるのは利が大きかった。

まず將軍の口利きで官位の昇進が有利になり、失った領地を取り戻す事も可能となる。また「家礼」となった見返りとして、將軍から恩領・給与を預かる事もある。

その代わり、幕府と禁裏や仙道御所の間の取り次ぎ役として動く事になり、また將軍が外出の際は必ずお供をする事が義務となる。

公忠はその「公家家礼」の一人だ。

だが、彼らとて貴族の矜持をきれいに捨てた訳ではない。公家の自分が、背に腹は変えられないとはいえ、武家に仕える事を恥と感じているのだ。だから彼らは公家に対しても武家に対しても、複雑な感情を抱えている。

「矜持か……」

そう呟き、俊之は冷ややかな嗤いを浮かべた。何事かを成そうとする時、一番邪魔で必要のないものは、その矜持なのだ。

『お兄様は世の中を変えようとする事よりも……』

昼間の妹の声が、耳に蘇ってきた。

「……世の中を変えるつもりなどない……私と今小路家の願望を叶えようとしているだけだよ……晶子」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3384y/>

雲居の月 - ある孤独な人の肖像 -

2011年11月8日02時08分発行